10月15日　ルカによる福音書１７章２０～３７節

説教題：「その日、人類は思い出すことになる」

今日は永眠者記念礼拝、私たちの先達を思い起こす日であります。天に帰られた兄弟姉妹のことを思うとともに、いつか私たちも神様によって天へと招かれて、先に天に召された兄弟姉妹と再会する時が与えられる、そのことを思い起こすことが出来る日でもあります。

そんな今日の聖書個所は、死後の世界として理解される「天国」、神様の御国についてと、その話を聞いた弟子たちとイエス様の間のやり取りが記されている個所です。

イエス様は神の国について、「あなたがたの間にある」と、もう既に存在していると今日の個所で言っています。イエス様が「私は先に行ってあなたがたが住む場所を用意する」と言っていた以上、私たちが死んだ後に行く場所に天国のような形で神の国があるのは確かなのでしょう。しかし、イエス様の活動によって神の国はこの世にもあらわれることが出来たのです。それは、イエスの宣教と癒しの力によって現実になりました。神様の御言葉に従い、神様の支配の中で人々が生きる、その国をこの地上に実現することが出来たのです。

神の国を実現しながら、その命を全うした私たちは、草木が枯れた後に種を残すように、その役目を終えることによって多くの人々の心に御言葉の種をまくことになります。「私はイエス様を信じていた」「神様の御言葉に支えられてこの人生を生きた」「本当に、神様に救われた人生だった」と、私たちはその命のすべてをもって証しをすることが出来るのです。

その結果が、この世の終わりである裁きの時に、すべたが明らかにされることになります。その日、裁きが起きるその日に、すべての人類は思い出すことになります。この世にはあらゆる信仰があったものの、何が真実だったのか、ということを。そして、自分がその真実に従って生きることができていたのかを、思い出すことになるのです。一人が救いに、一人が滅びに連れていかれるように、半数近くの人々が滅びる運命が待っているのかもしれません。

しかし、私たちはもう知っています。私たちの命が確かに多くの人々に御言葉の種をまくために、神様によって用いられている命だということを。そして、私たちがキリスト者として生き、キリスト者として証しをしながら生きるその人生によって、多くの人々を滅びではなく救いの側に引き寄せることが出来ているということを、御言葉によって教えられているのです。私たちの人生に、一つの無駄もありません。そのすべてが神様を証しして、イエス様を信じ、聖霊に強められていることを証しし続けるのです。その信仰によって支えられるこの人生を、最後の時まで、共に歩み続けていきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書１７章２０～３７節

・20:ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。人の子が現れる日にも、同じことが起こる。その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。ロトの妻のことを思い出しなさい。自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。言っておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。†そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」